筒井新聞　第 353 号（1）

5 回目のポーツマス滞在　(2019 年)

毎年 2 月から 3 月にかけて、律子はイギリスのポーツマスにいる長男夫婦の家へ出かけて、家事と子守を手伝うようにしてきた。長男夫婦がそれぞれ大学の教員をしており、冬学期の授業をしながら、期末試験の問題を作成しなければならず、家事と育児の手伝いが必要だからである。

今年は律子だけでなく、哲郎も同伴して 2 月 2 日（土）出国、3 月 3 日（日）帰国という予定で出かけた。

２月２日（土）

羽田を出発したのが 11：30、およそ 12 時間かけてロンドン郊外のヒースロー空港へ着陸したのが現地時間で 15 時少し前。それから長い通路を歩いて入国審査の大きな部屋に入るのだが、その部屋の半分がすでに長蛇の列で埋まっているのにびっくり。入国審査の部屋の待合エリアは大きく二分されており、イギリスのパスポートと EU のパスポート持参者の行列はほとんどなくて、さっさと終わっている。しかしそれ以外のパスポート持参者は長く蛇行している行列につかねばならない。東京からジャンボ旅客機で到着する約 500 人の乗客の 80%くらいはイギリスでも EU でもないようで、あっという間に列の後ろが部屋の奥行きの全長を埋めてしまう。そこで係官は行列の幅を部屋の半分から部屋の全長に改め、蛇行の幅を 2 倍にした。それでも次の便が到着したら部屋全体が埋まってしまった。1 列が 100 人以上、行列の折り返しは 10 列以上あると思われ、1000 人を優に越える人数であった。昨年律子が来たときはこの半分以下で 1 時間待ちだったのが、この日は 3 時間近く待たされた。つまり、手続きが終わって荷物を受け取り、空港出口に進んだのが 18 時ころであった。

パスポートコントロールの審査官が座っているブースは 40 個近くあるが、係官が在席しているブースは 10 個くらいしかない状態だった。長蛇の列の中には子供連れの人びとも少なくなく、中には乳児を腕に抱いている母親もいた。現地時間では午後 15 時から 18 時といっても、日本時間では 24 時から朝 3 時に相当する。

行列の脇に係官が水のボトルが何本も旅行者の苦労をいたわるかのように所々置いてくれました。「なんだ、長時間並ぶ苦労、わかっているんじゃないの、でも水でなくて係官増員してよ！」　飛行機に優先的に搭乗できた幼児連れの母親は「せめてバギーを借りられたらいいんだけど」とつぶやいていました。係官も疲れているようで、夫と私への質問は”Son or daughter?”だけでした。「滞在先の Kei　Tsutsui はあなたたちの息子ですか、娘ですか？」と言いたいのでしょうが、最小限の言葉で済まそうとしています。従来は滞在期間が長いので入国目的を詳しく丁寧に聞かれていました。英国が EU から離脱すれば

EU の人たちもこのレーンに並ぶのかしら？

イギリス政府の行政サービスに対する経費削減は、ひどいレベルに落ち込んでいるようだ。ちょうど、Brexit の交渉がメイ首相を袋小路に追い込んでいるニュースが少し前から繰り返されていて、こういうところまで気が回らないのに違いない。

3 時間後、ホテルへのシャトルバス出発所にたどり着きましたが、この発着所もわかりにくい場所にあって、今日の苦労はもうこれで勘弁してほしいという気持ちになっていました。が、シャトルバスのドライバーさんがすまなさそうに言いました。

「そのホテルへの運航は 2 月 1 日で打ち切りになりました。ホテルの経営者が～～に変わったので」

「え？　昨日で打ち切り？　あ～、思いがけないことが起きる、やっぱりイギリスだ！」

結局、そのバスに乗り、ドライバーさんが教えてくれた 1 街区先のホテルからスーツケースを引いて目的のホテルまで歩きました。

この晩は、空港近くの IBIS ホテルに泊まった。本当は、3 時間前について早々にベッドに入るつもりだったが、着陸の 1 時間半前に機内の食事をいただいてから 5 時間近くたっていたので、空腹を感じ、改めてイギリス時間の夕食を取って、シャワーを浴び、もうろうとした頭でベッドにもぐり込んだ。

２月３日（日）

ホテルを 8 時半ころに出て、近くのバス停で空港行きのバスに乗り、ヒースロウセントラルへ行く。そこで、ポーツマス行きのバスのチケットを買い、9：45 発のバスに乗った。このバスはポーツマスまで 3 時間かかるので、急ぐ人たちは、空港近くのウオーキング駅までバスで行き、そこから鉄道に乗り換えておよそ 2 時間でポーツマスまで行く便を利用する。しかし、われわれ夫婦は急ぐ旅でもなく、日本の食材を詰めた重いスーツケースを 3 個抱えてバスターミナルから鉄道のホームまで移動するのが億劫なので、一度預けたら目的地まで荷物を手にしなくて済むバスを選んだ。乗車券もバスのほうが少し安いようだ。それに、哲郎ははじめてバスのルートを経験するので観光のためにも好都合であった。

幸いこの日は快晴で、空気が澄んでいてうねうねしたイギリスの田舎を貫通する道路沿いの田園風景を楽しむことができた。イギリスは南海岸で北緯 50 度に位置し、緯度はサハリンの中央に相当する高い位置にある。その上土壌は石灰質であり、日本のように火山がないのでミネラル分に乏しく、植生が豊かではない。起伏の緩やかな牧草地がロンドンの郊外からずっと続いている。途中には 10 ㎝ほどの雪が積もっていたが、海岸に面したサウサンプトンに近づいてからは消えていた。ポーツマスはロンドンから南へ約 100 ㎞下ったところにあり、バスは少し西寄りに蛇行しながらハンプシャー州内の主要都市の駅前バス停に寄り道していく。その町と人口を記せば、ベージングストーク 8 万 5 千人、ウィ

ンチェスター（州都）3 万 5 千人、サウサンプトン 22 万人、ポーツマス 20 万 5 千人ということになる。途中はすべてハンプシャー州に属している。サウサンプトンからポーツマスまでは海岸沿いに走ったが、ところどころ背後の丘陵の崖に垂直の露頭があり、真っ白のチョーク（石灰岩）が見えた。この辺りは対岸のフランスのブルターニュ地方と同時に形成された石灰質の地層で、英仏海峡はその地層の真ん中が侵食されてできたものだということをしばらく前のテレビで見たばかりである。

啓の家に到着したら、マヤが玄関に少しはにかみながら立っていました。５歳になったばかりです。はにかみはすぐに消え、１２月に引っ越したばかりの家を得意になって案内してくれました。６軒つながりの端から２番目（町屋風の長屋。イギリスの住宅街はほとんどこの様式）。３階まであって浴室が２か所あるのが自慢です。一階は洗濯室、洗濯物を干しておく部屋、浴室、物置、２階は居間と台所、３階は寝室が３部屋と浴室です。台所にドアがついていないのが残念！　換気扇を使っても台所の空気がリビングに流れていき、揚げ物ができないのが辛い！　私の少ない料理のレパートリーがますます狭められて、毎日何を作ろうかと悩みそうです。

マヤは今、お気に入りの双六をさっそく広げました。蛇や梯子があちこちに描かれていて、蛇の頭のマスに駒が行ってしまったらその蛇のしっぽのところまで戻らねばならず、梯子の下の段に駒が進んだらその梯子の上の段のマスまで進んでゴールにより近くなります。私の駒が蛇の頭のマスに入ってしまって残念がったら、「これはそういうルールなのよ」と教え諭してくれました。でも、私の駒がゴール近くにいる時にマヤの駒は蛇の頭のマスに入ってしまい、ご機嫌がものすごく悪くなりました。が、すぐに梯子の段にマヤの駒が進み、一気に上昇可能となった時にみんな、「ああ、よかった」とクスクス笑ったところ、マヤは

「私、みんなに笑われたくないの」

尊厳を傷つけられたのです。子供になったり大人になったりします。

母親がマヤに何かのことで諭していました。

「そんなことしたらおかしい（funny）のよ」

「そんな事、言っちゃいけないんだよ。人のことを funny と言うのは無作法で失礼な（rude）ことなんだから」

私だったら funny と言われた行為をしてしまった自分を恥じてしまって、言い返すなど考えもしなかったと思うのですが・・・。

マヤは日本語、イタリア語、どちらも話は理解するのですが、もっぱら英語を使います。

「デデ（夫）はマヤになりなさい。パーちゃんはデデね。私はマミーよ」と“ごっこ遊び”を要求しました。私は夫に向かって

「マヤ、ちゃんと歯を磨きなさい」

マヤも“母親”になって

「チャント、ハヲ　ミガキナサイ」とたどたどしい日本語で言って、“赤ちゃんのマヤ”に大人として対峙していました。マヤが単語ではなく文として日本語を話すのを初めて聞きました。啓は以前、日本に帰って、日本の学校に７月だけでも通わせられたらと言っていたのですが、イギリスの学校の夏休みは日本の学校と同じ時期に始まるそうで、それは無理のようです。

典型的な住宅街。ほとんどの街並みが連棟式の町屋風

２月５日（火）

今日もマヤが学校に行くとき、親と一緒について行きました。グラマー・スクールのキャンパスには、大きすぎる制服を着た小学生が走り回り、高校生は颯爽と闊歩していて、それに見送りに来た親たちがいて、にぎやかです。マヤたち、ゼロ年生（来年から１年生になる）は、先生が手に持った鐘を鳴らすとクラスごとに並んで教室に入ります。マヤのクラスは 14 人なので短い列です。この日は少し遅れて到着したため、もうみんな教室に入っていましたが、仲良しの James がマヤに寄って来て言いました。

「マヤ、今日はケーキ屋さんまで行かなくていいんだよ。ケーキ屋さんが学校に来てくれるんだって」

買い物の経験をするために財布を持ってお店に行くはずだったのが、あいにく悪天候で、計画が変わったのでした。ああ、残念！　こちらから買い物に行くということが大事なのに。

マヤの誕生日パーティをどうしようかと、啓とフェデリカは考えあぐねています。クラスの友達全員が招かれる誕生会が何回かあり、トランポリン、ゴーカート（どこかの小学

校を会場として借りたそうです)、マジシャンによる手品など趣向が贅沢だったそうです。このように豪華な誕生会を取り仕切ることを仕事にしている業者がいると聞いて、びっくりしました。お金持ちの家庭の子供の遊び相手としてエンターテイナーがその家に派遣されるという記事を昨年新聞で読んで驚いたのですが、誕生会を扱う業者も裕福な子供たちの娯楽を担うという意味で同じ流れの人たちだと思いました。

２月５日（火）

朝８時にマヤ、フェデリカ、律子、哲郎の４人で家を出、近くのバス停でバスに乗り、2㎞ほど行って、グラマースクール脇のバス停で降りた。小学生から高校生まで、同じデザインの制服を着て、続々と登校してくる。小学生は、父兄が送り迎えする規則になっているので、親たちの数も相当なものである。

レンガ造り３階建ての校舎が長方形の四辺を構成するように配置されていて、生徒たちはいったんその中の広場に入って、それぞれの校舎に入っていく。小学生は Junior Grammar School という一角に教室があり、時間になると先生がカランカランとベルを鳴らし、その合図で教室へ入っていく。マヤのクラスは 14 人だという。親しいクラスメートの James 君は、はにかみ屋の優しい男の子である。ヘンゼルとグレーテルの話を聞いた晩には、焼け死んだ魔法使いのおばあさんの姿を想像して恐ろしくて寝付けなかったそうだ。他方、マヤは悪者のおばあさんが死んだのが愉快で「ガハハ」と大笑いしたそうだ。

当然親同士も顔見知りで、James 君のお母さんとフェデリカはいつも挨拶する親しい間柄で、われわれも挨拶した。

この近くには公立の学校もあり、通りには違う制服の生徒たちも行き交っていた。Grammar School は、いわば〈私立名門校〉で、遠方の街から親が車で送り迎えしている生徒もいる。経済的負担も多いので、家庭環境としては金持ちか、教育熱心のためにやせ我慢して通わせている中流かの 2 通りである。

マヤを教室へ送り出してから、律子と哲郎はポーツマスの海岸の土手の上を東に向かって散歩した。引っ越し前に住んでいた旧市街のネルソン提督の銅像の近くで土手に上り、対岸のワイト島を南に臨みながら、対岸のフランスのシェルブールやルアーブルに向かう 7 階建ての窓が連なる大型フェリーが行き来するのを眺めたりした。海辺の土手の内側には数百メートルの幅の緑地が延々と広がって大きな公園になっている。寒い中にもかかわらずその自然の中を散歩している人たちが少なくない。土手沿いにはところどころ、ワイト島へ行くホーバークラフトの乗り場、こじんまりした遊園地、第 1 次大戦と第 2 次大戦での戦死者を記念する慰霊碑、1544 年にヘンリー8 世が建設したという海防の大砲を備えた城跡、ジムやプールを備えたスポーツセンターなどが点在している。

2 時間ほど散歩してから街中のスーパーマーケットで買い物をし、こじんまりしたデパートで昼食をとって、家へ帰った。

２月６日（水）
　今日は、まぶたが腫れてしまったマヤをまず保健室に連れて行って、その後教室に送り込みました。アシスタントの先生が
「マヤ、大丈夫よ、今、始まったばかりだから。今日はみんなで中国のことを勉強するので教えてあげてね」
フェデリカが訂正したようで、すぐに言い換えました。
「マヤ、日本のことをみんなに教えてあげてね」
どうも日本の存在感は薄いようです。そして今学校からパソコンに送られてきた写真を見ると、今年の干支、猪という漢字を書く練習をしてその成果をみんな手にもって写っています。また体育の時間ではみんなリボンを手にして中国のダンスをしており、ドラゴンを揺り動かしています。学校からその日の写真が下校時間の前に親に届くことにびっくりしましたが、また中国の文化に敬意を払って学ぼうとする姿勢が、中国としっくりいかない日本から来た身には新鮮でした。この街に住む友人のゴードンさんも、毎年中国のお正月を祝う行事を楽しみにしています。
　中国の人たちは古くからイギリスに移住していたのかしら、とネットで調べてみました。中国人のイギリス移住の初期の人びとは、イギリスと中国との間のアヘンやコカインの取引増加により、船員として雇われた広東地方の農夫だったそうで、1840 年代のアヘン戦争以前のようです。その後、天安門事件や香港返還の後も合法、不法を問わず移民は増え続けたそうです。漱石の『自転車日記』にロンドンで自転車に乗れるようになったばかりの漱石が町へ出かけたことが書いてあります。後続の自転車に乗っている人たちに、手を挙げて角を曲がることを知らせなかったために、すぐ後ろを走っていた人が自転車から転げ落ち、漱石に「チンチン、チャイナマン」と罵ったそうです。当時のロンドンには中国人がかなり住んでいたことがこのことからも分かります。中国との間に負の歴史があったにしても、今、このように中国のお正月を小学校でも祝っているのは素晴らしいことだと思いました。
　そしてマヤの一番の友達が中国の女の子であることも嬉しいことです。
　この日は深い霧で、10m 先もはっきり見えない。これがイギリスの天気なのだと実感した。近くの海から、行き来する船が鳴らす霧笛の音がしきりに聞こえてくる。昨日は海岸沿いに東に向かって散歩したが、今日は西に向かって 2 ㎞ほど先の鉄道の終点 Portsmouth Harbour Station に向かった。途中ワイト島へ行くフェリー乗り場のそばにあるこじんまりした魚屋へ寄って、夜の食材用にカレイを買った。イギリス人は日本人ほど家庭で魚料理を食べないようで、この大きな町でも魚屋はここしか見かけない。
　鉄道の西側は大英帝国を支えてきた海軍の軍港が今もあり、その後背地が古い市街で、以前チャールズ・ディケンズの生家を見に行ったことがある。東側にじょじょに町が広がって、現在の市街を形作っている。したがって、東の方が庶民が多く活気がある。鉄道終点の周辺を最近再開発して、Gunwarf Quay というショッピングセンターが作られて、その中に大

きなカフェがある。そこで飲み物を頼んで、ゆっくりと本を読んだりパソコンで仕事をしたりしている人が少なくない。霧が深くて散歩もままならないので、その店へ行って本を読むことにし、9 時半ころから約 2 時間その店で過ごした。

霧がじょじょに晴れて雲間から薄日が差し、対岸のワイト島が見えるようになったので、ランドマークになっているスピナカータワーへ行って、1 階のカフェへ入り、昼食をとった。よくわからないまま、メニューの最上段に書いてある Hampshire Breakfast を頼んだら、太いソーセージ、分厚いベーコンが二切れ、目玉焼きが 2 個、大きなキノコや厚切りポテトのフライが 2 個という、ボリューム満点の大皿が出てきた。なんでも、イギリスのお百姓さんたちは大喰らいであったそうな。おまけに、飲み物として頼んだカプチーノがまた大きなカップであった。

満腹して駅前からバスに乗って家へ帰りついたのは 1 時過ぎであった。

２月８日（金）

今日は朝から雨風激しく、インターンをしている学生に会いにロンドンに出かけた啓は鉄道線路に倒木があって不通となり、途中から引き返してきたほどでした（経済学部の学生は３年生のある期間、ロンドンの会社に研修のために勤務する。先生は、その会社を訪問して、面倒を見てもらている会社の人びとに挨拶し、学生の相談に乗る）。そのような悪天候の日は車で動く人が多く、朝、市内バスが渋滞してマヤは学校にかなり遅れて着き、べそをかきました。先生は

「マヤ、おはよう！　今日はフィッシュ・アンド・チップスの日よ！」と元気づけました。

え？　フィッシュ・アンド・チップスってごちそうなの？　後で啓に聞いたら、みんなが好きな食べ物なのだそうで、日本の子供たちのカレーライスに当たるそうです。フィッシュ・アンド・チップスは金曜日のメニューなので、明日、明後日はお休みよという意味もあるそうです。まだ元気が出ないマヤに先生は

「マヤ、おじいちゃんとおばあちゃんに教室を見せてあげなさい」と、私が期待していたことを言いました。教室は子供 14 人にしては広く、5，6 人が座れる机があちこちに置いてあり、子供たちの色とりどりの製作品が飾られていました。

「マヤ、この間描いたお城の絵をお祖母ちゃんたちに見せてあげなさい」

男の子が一人やって来て「これ、僕が描いたんだよ」

人懐こいアレクサンダーでした。マヤにジングルベルの替え歌（「犬がうんちをした」のような）を教えてくれた中国の女の子、エヴェリン、「ヘンゼルとグレーテル」の本を読んで怖くて寝られなくなったジェイムズ、どの子も学校から送られてくる写真で私には顔なじみでした。

夕方も台風のように傘がさせない雨風でしたが、フェデリカと二人で迎えに行きました。雨があまり当たらないところを歩いていたらマヤがついてきていませんでした。運動

場を駆け回っていたのです。レーンコートを着ても顔に大粒の雨が当たっていたはずなのに。後で啓にその話をしたら
「イギリスの子になってしまったなあ」
イギリスの子は、雨を鬱陶しいと思わず、喜んでいるのかしら？　そう言えば、何か楽しそうでした。

２月９日（土）
　ポーツマスから急行で３０分くらいのところにあるチチェスターという町に遊びに行きました。何回か行っているマヤは大聖堂の中を
“OK, everybody, follow me.”と地図（これを手にしないと案内できないという感じで）をもって私たちを先導してくれました。おかげでゆっくり見たいところを端折られてしまいました。隣の歴史博物館では、ローマの遺跡から出てきた数々の品が展示されていて、２０００年前のローマ人の技術力と審美眼の高さに脱帽しました。子供も楽しめるようにいろいろな趣向がありましたが、マヤの好きなのは骸骨をパズルのように組み立てる遊びでした。骸骨、怖くないのかしら？　（チチェスターはポーツマスから東へ20ｋｍほど行った古い海岸の町で、ローマの植民都市が建設された。町の中心には現代のアミューズメントパークともいうべき大浴場があった。現在は大聖堂で有名）

チチェスターの聖堂と庭園

２月１２日（火）
　今朝、学校に送っていくとき、マヤは地面に引きずるような大きな袋を手にしています。日本の子供たちのランドセルに相当する黒いバックパックは母親が手にしています。

「マヤ、その袋の中に何が入っているの？」
「おもちゃ」
「どうして学校におもちゃをもっていくの？」とフェデリカに聞きました。
「友達みんなの前で、自分の好きなおもちゃを見せてその説明をするのよ」
「わー、素敵な授業ね、マヤ、そのおもちゃを見せて」
「ノウ、パーちゃんは子供ではないのだから」
思い出しました。アメリカの子供たちがこれと同じ授業を受けていることを書いた文章です。将来、堂々と人前で意見を述べることができるように、幼いときに、クラスの全員に自分の宝物を見せて説明させるという内容でした。恥ずかしがって話ができない子たちには先生が質問をして話を引き出し、このような経験を積ませて、意見を披露する自信を持たせるということでした。

そう言えば、10 日の日曜日に列席したカソリック教会では、神父さんが子供たちを前に来させ、質問をしながら説教するという時間がありました。神父さんの質問に多くの子供たちが手を挙げて、臆することなく意見を言っていました。神父さんが質問をしないうちから、（ということは）ずっと手を挙げている男の子がいました。アメリカ人のロアさんが以前、「話しながら考え、考えながら話す」と言っていましたが、この男の子もそうなのかもしれません。神父さんはその男の子には一回しか指名しなかったのですが、すべて終わってからその男の子に向き合い、話を聞いていました。さすが神父さん！

マヤが運んでいた白い大きな袋は“chatter bag”と言われていて、それぞれの子供が持っているのではなく、話す順番になった子供が先生から渡されるのだそうです。マヤは意気揚々とその袋を運んでいたので、日本のお祖母ちゃんに似ず、人前で話すのは平気なのかもしれません。

議論ができるように国語（英語）の授業に力を入れているようだと啓が言いました。マヤは夜、宿題の絵本を読んでから寝ます。アルファベットの文字それぞれがどういう音なのかをマスターしているので、pig などは「ピ　イ　グ」とその音を発音して、自分が知っているピッグだとすぐにわかります。でも Left and right.のときは、left and まではすぐに読めましたが、r の発音の後の i を「イ」と発音して、「リ」と言って止まってしまいました。i は「イ」になったり「アイ」になったりでややこしいですね。その絵本の語彙のレベルはかなり高いと思いました。

その代わり数学には力が入っていないようで、掛け算の九九を 11 歳から学ぶと聞いて啓たちは驚き、日本から教科書を取り寄せて家で教えなきゃ、と言っていました。

日曜日に近くにある自然博物館に行ったときに、そこに置いてあった動物の絵本に、なまけものが木の枝にぶらさがっている絵がありました。マヤが“Sloth”と言ったときに、「もう一回言ってみて」と言ってしまいました。この単語の発音は日本人にはとても難しいです。S の後に母音が入ってしまい、また L そして TH の音が難しいからです。日本語

は口を動かさなくても発声できる言語なのだと痛感します。バスに乗るとき「ケンブリッジ・ジャンクションまでの往復一枚」を言うときに聞き返されないように、口の周りの筋肉を動かして”鍛錬“しています。

2 月 15 日（金）

今朝、メイ首相の EU 離脱方針が議会で否決されたことを知りました。議決の際には首相はその後の対策、方針をすぐに演説できるよう出席していることが慣例だそうですが、メイ首相はその場におらず、野党から彼女を呼んでくるようにという声があがったそうです。官僚がまとめたことを読み上げるのではなく、その場ですぐに意見の表明、これからの対策の説明ができる政治家は、小さいときから意見の形成、表明の訓練ができているのだなあと思いました。

マヤの学校への送り迎えが楽しいです。小さい子が駆け回るのを見ているのも楽しいですが、高校生が胸を張り大股で歩いているのも見ものです。ただ姿勢が良いだけでなく、自信が体からあふれているように見えます。フェデリカにそう話したところ、次のように言いました。

「元の同僚で労働者階級の人がいたんだけど、若いころ大学ではグラマー・スクール出身の学生たちが堂々と意見を言うのに反し、自分は引け目を感じて、自分の思いを打ち出すのが大変だったそうよ」

「階級社会ね」

イギリスの人は誰でも議論に長けているわけではなかったのでした。グラマー・スクールに通えることはとても幸せなことなのでした。マヤが通うグラマー・スクールのすぐ近くに公立の小学校があり、ブルーのタイツをはいた子たちが親と登下校しています。赤のタイツのグラマー・スクールの子たちとすぐ識別ができます。私はブルーのタイツの子たちを見るとなにか申し訳ない気持ちがしていました。グラマー・スクールの門の前にいつも守衛さんが立っていて、親や子供たちににこやかに挨拶をしているのですが、一度、ブルーのタイツの子とその親にもにこやかに声をかけているのを見て、嬉しくなりました。

啓たちが、裕福でもないのに学費がかかるグラマー・スクールを選んだのは、公立校が荒れているからだそうです。

「荒れているって、どういう意味？　たとえば？」と聞きました。

「先生たちを尊敬しないんだね。小学校で教師をしている人が言っていたんだけど、低学年の子が”I am stupid."と書いた紙を頭の上に乗せるように言ってきたそうだよ。そう言えば、僕のクラスに、前は公立高校の数学の教師をしていた年配の人がいたんだけど、教師の半分はやめていくと言ってたよ」

マヤと仲良しの中国の女の子のお姉さんも同じグラマー・スクールに通っているのですが、顔が違うということでクラスでからかわれたことがあったそうです。運動場でアフリカ

系、ヨーロッパ系、アジア系の子たちが仲良く入り混じって遊んでいるのを見て、このような環境では人種の多様性を小さいときから受け入れられるのでは、と思いましたが、それは楽観的過ぎる見方でした。公立の学校ではもっとこの種の偏見が顔を出す可能性があり、これもグラマー・スクールを選んだ理由の一つなのでしょう。

２月１７日（日）

今回一緒にポーツマスにやって来た夫は、午前中は本を持って散歩して喫茶店で時間を過ごし、午後はパソコンで仕事をして、「休暇」を楽しんでいます。この築 50 年の家のドアがきちんと閉まらないのがまず気になり、どうにかしようとエンジニアらしく動き出しました。”B&Q”という日本の大工センターのような大型店に何回か行って道具をいろいろ買ってきて、ドアを少し削ったりペイントを塗ったり、楽しそうでした。一回目は私も行きましたが、何か楽しそうな夫と比べて私は退屈しました。天井が高く、通路が広く、ゆったりしていましたが、窓が無いのは日本と同じで、早くそこから出たくなりました。

ポーツマスの港のカフェのガラス越しに、ヨットやワイト島行きフェリーを眺める

この家は 6 軒が隣接している長屋風の建物ですが、端から 2 番目に位置しているので、2 面が外気にさらされず、そのためか寒くないのです。前の住居では私の寝室は東と北に大きな窓があり、夜はパジャマを 2 枚重ね着してもまだ寒かったのですが。隣接している家が多いのは、イギリスが寒いからということもあるかもしれないと思っています。

台所には備え付けの高い戸棚があるのですが、私には一番下の段でも高すぎます。普段使いのお茶碗などが手の届かないところにあって不便です。日本では小皿でよいような料理

も大きなお皿を使うことになり、その出し入れがまた大変です。

２月１８日（月）

学校は学期半ばのお休みとなり、共働きの親たちは、日本の学童保育のようなサービスをしてくれる YMCA に子供たちを預けます。学期半ばにどうして一週間の休みがあるのか解せませんが…。マヤは風邪気味なので今日はそこを休みました。私はこのような時のために来たようなものです。朝からあらゆる遊びに付き合いました。古くからの日本の遊びは素晴らしいなあと思いました。おもちゃを使わなくても、手だけを使う遊びこそ、遊びの原点だと思います。にらめっこには毎回大笑いをしています。「上がり目、下がり目…、猫の目」「だるまさん、だるまさん…、あっぷっぷー」はすぐに覚えました。イタリアにはこのような遊びは無いそうです。たぶん、イギリスにも。「せっせーせーのよいよいよい」も大好きです。「オティラ　ノ　オショサンガ　カボチャノ　タネヲ」と高速で歌ってご機嫌です。マヤは動くおもちゃが好きで、人形にはあまり関心を示さず、リビングにはどなたからか頂いたばかりの 40 センチくらいの可愛い人形が置いてあるのですが、ほったらかしです。その人形は「あっぷっぷー」をさせられる時だけ目の目を見ます。私の友人がマヤにお人形をくださったのですが、「お嬢さん」から「お婆さん」に早変わりができる「魔法のお人形」なので、パーちゃん（私）と自分だと言って喜んでいます。あやとりはまだ無理でした。お手玉は雪合戦の雪玉に変わってしまいました。

２月１９日（火）

フェデリカがケント大学に勤めていたときの同僚のご一家が訪ねてきました。7 歳のソフィアと 3 歳のダレンも一緒です。学校が学期半ばのお休みなので旅行されているのです。マヤが「エドワードは…」と言ったので、そういう名前のお子さんもいるのかしらと思ったら、父親の名前でした。日本だったら「おじちゃん」とか「ソフィアのお父さん」という言い方になるところを、エドワードと名前で呼ぶと、子供と大人の垣根が一挙に低くなります。奥様は体調を崩されてホテルに残っておられましたが、啓が言うには、奥様はロシア出身ですが、子供にはロシア語を教えていないそうです。ソ連時代に良い思い出がないそうなのです。

「ダレンはやんちゃだから、パーちゃん、パソコンをベッドの下に隠した方がいいよ」とその日の朝、マヤが言いました。一年前の動き回るダレンの記憶が鮮明だったようです。また、ダレンがコードを引っ張って父親のパソコンを落として壊してしまったことを親の会話から聞いていたのです。マヤからパソコンを隠していた私でしたが…。ダレンは一年経って、落ち着いて静かになっていました。マヤも一年経って、恥ずかしがりやから脱皮して、「うちのママがね…」と言わない方がよいことまでエドワードに披露するおしゃまさんになっていました。

２月２０日（水）
　ブドウ（南アフリカ産）を食べながら
「ママ、この一個は grape って言うの？　grapes って言ってるのはたくさん集まっているから?」
またママに聞きました。
「ドラットってどういう意味？」
「何それ。どんなスペルかしら？」
「d-r-a-t　ミセス・ウエブが言ってた」
聞いた音でスペルはたぶんこうだと類推できるのです。フェデリカも私もこんな単語無いのでは、と思ってたら、辞書にちゃんとありました。「〈主に女性語〉あらっ、もうっ〈いらだたしさを表す〉」
5 歳にしては難しい言葉を使ってびっくりさせます。マヤと相撲のような取っ組み合いをしていたら
“I’ll definitely squish you!”
台所では、“This is a brand new coffee maker.”
　先生の言うことは絶対だと信じているマヤは幸せです。クラスのみんなも先生に全幅の信頼を寄せていて、先生を見つめる子供たちの目が飼い主を見上げている子犬の目のようだとフェデリカが評したほどです。「蛇と梯子」の双六をするのを嫌がる私に言いました。
「『あまり好きでないことは 6 回やりなさい。そうしたら好きになれる』ってミセス・ウエブが言ったんだよ」
　夫と私にマヤが寝る直前に読む本を読んでくれたことがありました。途中で私が夫に話しかけたら
「私が読んでいる最中にお話ししないの！　ちゃんと聞いていなさい」
怖い目をして言いました。ミセス・ウェブもこういう目をして叱るんだろうなあ…。
　朝、マヤが学校に出かけるのをぐずぐずしているうちに、夫が本を持って黙って出かけたことがありました。夕食時にマヤが私に耳打ちして言いました。
「デデ（夫）が『さよなら』を言わずに出ていったのはおかしいんだよ」
「マヤ、それを声を出して言ってみて」
マヤは続けました。
「今、そのことで『ごめんなさい』を言わないでいるのもおかしいんだよ」
みんなで笑っていたら
「今晩、デデは寝る時に『おやすみなさい』が言えるかな？」

　家族の誰かが帰宅すると、マヤと二人ソファの裏側に隠れ、かくれんぼをします。私が何かしゃべるとシーッと制します。でも自分が何か音を立ててしまって私がそれを指摘すると”Don’t worry.” これは「心配しないで」よりも「これくらいのことは大丈夫、大丈夫」に

聞こえました。夫の一言、「他人には厳しく自分には優しいんだな」

２月２２日（金）

啓たちは、イギリスの EU からの〈合意無き離脱〉に備えて、今、買い物のリストを作成中です。生活必需品が品薄になるという危機感を抱いているのです。ドーヴァーには今トルコなど EU 以外の物品が EU を通過してイギリスに入ってくるのを検査する税関の職員が 200 人いるそうですが、3 月 29 日以後は EU の生産物に全部目を通すことになり、その人数ではとても足りないそうです。税関検査を通過するのに何日もかかり、果物や野菜は腐ってしまうのでは…。ちゃんと検査するにはドーヴァーだけで 8,000 人ほどの職員が必要だと聞いたのですが、この数字本当かしら、と今も怪しんでいるほどです。それも、ドーヴァーだけでこの人数だとは！　スーパーマーケットから食品が消えてしまうのでは…。EU 産の薬もイギリスに入りにくくなるのでは…。外国籍の飛行機に燃料を入れる空港の職員の資格も EU 離脱で消滅してしまい、飛行機が飛べなくなるのでは…。数え上げればいろいろ心配事が出てきますが、町を歩くと、そのような深刻な事態を感じられません。結局、離脱を延期して時間稼ぎをすることになるのではと啓は言いましたが、時間稼ぎをしても、いつかはそのような事態に直面することになるでしょう。政治家はこれから先の国の有様や、国民の幸せより、国内でのパワー・ゲームの方が大事なようです。

家の近くの St. Jude 教会

２月２４日（日）

今日はフェデリカが夕食を作ってくれました。ムール貝がおいしかったです。マヤは赤いパプリカをバルサミコに漬けながら食べていましたが、

「ママ、これに塩を少し入れてくれる？」
ママは忙しくてすぐに反応しませんでした。
「ママ、塩を入れてくれる？　Yes or no?」
私はびっくりして言いました。
「日本では、Yes or no?は大人が子供に言うセリフでないかしら？　子供からは言わないはずで、子供は何回も『塩をいれてちょうだい』を繰り返すだけだと思うのだけど」
マヤが話を聞いていて言いました。
「”Yes or no?”は日本語で何と言うの？」
これには、夫も啓も答えに窮しました。日本語では、ただ「はい」「いいえ」ではないと思います。Yes、No についての話が続きました。日本でははっきり Yes, No を言わないで中間的なところで止まっている人が多いのでは？　世論調査で、意見が両極端に分かれる時に、「どちらでもない」と答える人がかなりいます。はっきり Yes や No と答えたり、人に “Yes or No?” と聞くのを控える傾向があると思います。ましてや子供から大人に…。

２月２５日（月）
　一週間の休みが明けて、今日はマヤが学校に行く日です。大人はやれやれとホッとしていましたが、マヤはぐずってバスに乗るまでが大変でした。学校に着いてみると、仲良しのエヴェリンもイヤイヤをしていたようで母親に手を引っ張られて仕方なく歩いています。学期半ばの休みなど無い方がよいのに…。お昼頃、啓のスマホにマヤの写真が学校から送られてきました。芝生の上に色とりどりのパネルで作ったロケットが置いてあってその横に一応にっこりして立っていたので、あ～、良かった！　14 人の子供たちに教師が二人配属されているので、このようなサーヴィスができるのです。恵まれ過ぎた環境です。
　豊かな家庭の子、貧しい家庭の子、勉強のできる子、できなくても何か取り柄のある子などが入り混じっていた、昔通った学校が懐かしいです。そのような環境だからこそ、社会について、生き方について学べたこともあったと思うのです。

　マヤは「せっせーせーのよいよいよい」が上手に言えるようになりました。平成版の長いのを、初めはぎこちない日本語でしたが、私と一緒に歌っているうちにきれいな日本語で歌えるようになりました。
「わたしが一人で歌うから、パーちゃんは口をつぐんでいて。
　せっせーせーのよいよいよい　お寺の和尚さんが　かぼちゃの種を　蒔きました。芽が出て　ふくらんで　花が咲いて　枯れちゃって　忍法使って　空飛んで　東京タワーにぶつかって　雷ごろごろ　じゃんけんぽん」
　言葉の意味がぜんぜん分かっていないのによく覚えられるものと、子供の言語能力に驚きました。全部マスターしてない時に「東京タワーにぶつかって」だけを何回も言っていましたが、「東京」という言葉は以前からよく耳にしていたからだと思います。

またジングル・ベルの歌を中国式に歌ってみせます。中国のお友達が家族と話すのを聞いていて、その特徴をつかんだのでしょう。無茶苦茶の言葉ながら発声から中国語の雰囲気がよく出ていて、子供の語学能力に驚きます。

いつも R と L で苦労している私は、マヤの教科書を覗いてみました。アルファベットとその音の出し方が絵入りで紹介されています。R は「布きれをくわえて引っ張っている子犬になったつもりで、歯をしっかりとくいしばって頭を振りながら rrrr と言ってみなさい」L は「ぺろぺろキャンディをなめているつもりで llll と言ってみなさい」これらを実行してもうまく発音できませんでした。

２月２６日（火）

マヤを学校に見送ってから、早い時間でしたが、ゴードンさんのところにお邪魔しました。先日、マヤから”drat”は何かと質問された話をしました。

「あ～、これは良い言葉ですよ」

「え？　良い言葉なのですか？」

「そうそう。Dammit のような乱暴な罵りの言葉の代わりに仕えるのでね」

なるほど、「ミセス　ウェブが言ってた」というマヤの言葉を思い出しました。

英語の言葉をいろいろ教えて下さり、家が長屋のように並んでいるのは terrace, 一軒家は detached, ２軒つながっているのは semi-detached,　平屋は bungalow　というのだそうです。Bungalow はインド語源の言葉で「ベンガル風の」という意味だそうです。

「町を歩いていると、足が不自由で杖を持った方が多いですね。階段のある家でなくて平屋の方が便利だと思うのですが、平屋の家は見かけませんね。それにしても Bungalow という植民地の言葉を宗主国側が取り入れたのは興味深いです。」

「インド以外にも他の国の言葉が結構英語に入ってきているんですよ」

「日本語の tsunami もそうですね」

「英国では津波は起きませんがね」

「ポルトガルでは起きたのですよ。１７５０年代ですね」

「いやあ、僕はそのことは覚えていませんね」

「ところで、ゴードンさんはイタリア語を頭の中で翻訳などしないで自然に話せると前におっしゃいましたが、そのようになるのにどれくらいかかりましたか？」

「いやあ、今も学んでいる途中ですよ」

コーヒーテーブルの下には何事もすぐに調べられるように分厚い辞書が置いてありました。英語、イタリア語、フランス語、ラテン語の本も書斎から持ってこられました。戦後すぐにイタリアのトリエステに兵士として派遣された時は１８歳だったといっていましたから、たぶん大学には行っていないと思いますが、独学で学んでこられた強さがあります。自分で調べ、考え、自説を作り上げる、を繰り返してこられた人生であり、意見をはっきり述べられます。学校で教えられたことをほぼ鵜呑みにしてきて自分独自の意見が弱い私は反省さ

せられます。
　ゴードンさんは中国に友達が何人かいらっしゃいます。ポーツマスに留学していた中国の学生たちと親しくなり、結婚式に招かれたり、中国に旅行された時の写真を見せてくださいました。
「私にとって、彼ら中国の友人はとても大事なありがたい存在でした。英語を教えてあげたり、生活の面倒をみてあげたりして、中国の親御さんから感謝されました。20 年以上前に妻を亡くしてからの私は、誰かのために役に立っていると思えてこそ生きてこられたと思うのです」

２月２８日（木）
　一階のシャワールームの排水がよくありません。床にお湯がたまってきます。また夫の出番です。今朝は夫とゴードンさんを訪ねる予定だったので、どう対処すべきか意見を伺うことにしました。
「啓のところのシャワールームの排水管が詰まって（clogged）いるんです」
「やあ、良い表現を使われましたね。Blocked でも意味は通じますが、clogged の方が汚いもので管がふさがっているという感じがしますよ」
やはり言葉に敏感なゴードンさんでした。それから化学的、物理的に対処する方法、必要な道具を売っている店を教えてくださり、管が詰まったときに使う薬品のボトルも見せてくださいました。ということはゴードンさんのところも排水管が詰まったことがあるのですね。
「ゴードンさんも家のことで不具合があったりしますか？」
「いつもですよ」
とこともなげにおっしゃいました。
「イギリスの家はいつもどこかここか不具合が出てきていつも修理するんです。今は台所の窓がちゃんと閉まらないのです」
　この何気ない返答により、私は目の前が急に開け、イギリス理解が深まったような気持になりました。故障や不具合はあってはならないものではなく、あって当然であるという達観した見方に脱帽しました。ここから苦しいときにもユーモアを忘れない余裕が生まれるのでは？「イギリスは本当にだらしない国よ」と昨年出会ったロンドン在住の日本人ほどではないにしても、私もイギリスの“だらしなさ”を嘆いていました。でも不具合は起きてはならない非日常の事態であると思っていると、不具合が起きた時への対処に精神的緊張が伴います。不具合、故障が日常的に起きることを良しとしないからこそ、私たちは「原発は絶対に事故は起こしません。安心、安全です」を信じてしまったのかしら？
　いつもはマヤを学校に見送った後、いきなりお邪魔していたので部屋着でしたが、今日は来訪を知らせてあったので、きれいな青色のシャツを着ていました。
「素敵な色のシャツですね」

「ありがとう。でもあなたは conman ですよ」
コーヒーテーブルに載っていた新聞に、トランプ大統領は conman と評されていて、この言葉の意味を確認したばかりでした。「口先のうまい人」という意味です。
　啓の新居を訪ねたいとおっしゃっていたのに、今は啓もフェデリカも一年で一番大変な時で、睡眠時間を削って働いており、お招きできないことをお詫びしました。
“I hope they will be unclogged.”
“unclog”なる言葉があることを知りました。

３月１日（金）
　夕べ、マヤはいきなり部屋に入ってきて、「金星はとても熱いんだよ。木星は大きいんだよ。土星には輪があるんだけど、〜〜も輪があるの」
この「〜〜」が聞き取れませんでした。それに土星以外に輪のある惑星ってあったかしら？
私が理解してないとみると
“OK. Everybody, come to my bedroom.”
啓はいなかったので、フェデリカ、夫、私が召集され、それぞれ指示された通りに座りました。
“Thank you.”
と言って，講義が始まり、子供用の宇宙の本を開きながら説明してくれました。啓からもう説明を受けていたのでしょう。「〜〜」は Uranus で天王星だとわかりました。なるほど天王星にも輪があり、それも垂直に回っているのです。
“Can you say ‘Pluto’?”
“Pluto.”
復唱したのは私だけでした。
“Everybody, say, ‘Pluto’.”
3 人そろって”Pluto."
“OK.”
冥王星から水星まで全部説明した後、
“Do you have any question?”
大人を相手に堂々としていました。そして
「パーちゃんは夜の間に聞いたことを忘れるかもしれないから、この本をベッドルームに持っていきなさい」

　今朝、マヤはその本を学校に持って行って、クラスのみんなに宇宙について話をさせてもらいました。クラスのお友達も私たちのように復唱させられたのかしら？　学校に迎えに行ったときにウェブ先生が褒めてくださいました。そして鞄の中には今日の話が良かったとして表彰状が入っていましたが、マヤの名前が Maya Tsuitsui になっていたのはご愛敬

でした。
　学校では、毎月テーマがあるそうで、今月は宇宙がテーマだったのです。夫が言いました。「ちょっとやり過ぎだな～。自分から宇宙について興味を持つ、と言う前に、学校が情報を先に与えてしまっているのは。自分で宇宙について関心を持ち始め、自分で知るという喜びこそいいんだけどなあ」
　私も 5 歳の子はまだ宇宙など知らなくてもいいのでは…と思いました。「ダディ、20 になったらダディと結婚するね」と言ったマヤはちょっと前までママと結婚するつもりだったのです。女どうしでは結婚できないと聞かされて、ダディに乗り換えたのでした。まだこんな幼さです。

３月２日（土）
　お昼ごろにヒースロー空港行のバスに乗って、ポーツマスを出発しました。家を出るとき、マヤに言いました。
「マヤ、マヤはパーちゃんが一番好きな子供なのだから、また来るね」
数日前、中国の女の子、エヴェリンを「良い子だ」と褒めたら、マヤの機嫌が悪くなりました。「マヤも良い子だよ」と言っても「先にそれを言わなかった」とご機嫌斜めでした。去年の失敗を思い出しました。態度で示していればよいという奥ゆかしい日本のやり方ではなく、言葉で言わなければならない文化圏なのだと。
　マヤの自己主張の強さは、英語圏では普通なのか、マヤ特有の性格なのか、今もわからないままです。

３月６日（水）
　帰国した後、ポーツマスでの一ヶ月を振り返り、イギリスの人たちは知らない人とも緩やかにつながっているという気がしてきました。乗客がバスのドライバーさんに行き先を言う前に「おはよう」と挨拶をする人が多く、ドライバーさん側から声がかかる場合もあります。バスの外で乗車を待っている人のために、必要なことだけを言って効率を優先してもよさそうですが。また、降車を知らせるボタンが日本人の私には少なすぎて、手が届くところにありません。初めは不便だなあと思ったのですが、よく見ていると、バスを降りたそうにしている人を見かけて代わりに押してあげる、そして押してもらった人は目で笑って感謝を表す、これが自然に行われています。日本のバスは他人の手を借りなくても済むようにどこに座っていてもボタンが押せます。まるで自己責任をバスの中でも貫いているような…。たかがバスの中、でも社会の姿が現されている気がしました。

（2019 年 3 月 7 日　　律＋哲）